津高同窓会報

発行所
津市新町3丁目1－1
津高等学校
同窓会事務局

伝統のもと友垣固し

＝昭和四十九年度総会の記録＝

「源遠く出で来る　古き流れのここに合い　又新しき流れなす…」

光輝あまねき伝統のもと、永劫輝き学灯の影慕う思いは同じ友垣が、年に一度傾児やっ女の昔に返り、縷々として一堂につどう、われらが津高同窓会の四十九年度総会は、八月第一日曜の四日昼過ぎ、津商工会議所において催された。

つどえる会員一百数十名、しかも若き世代の参加すくなからしとはいえ、つどえる友垣や高く、相共に校歌斉唱、談笑、歓談に舷に、熱き思いの懐かしき夏の日のひとときを過ごしたのであった。

◇　◇　◇

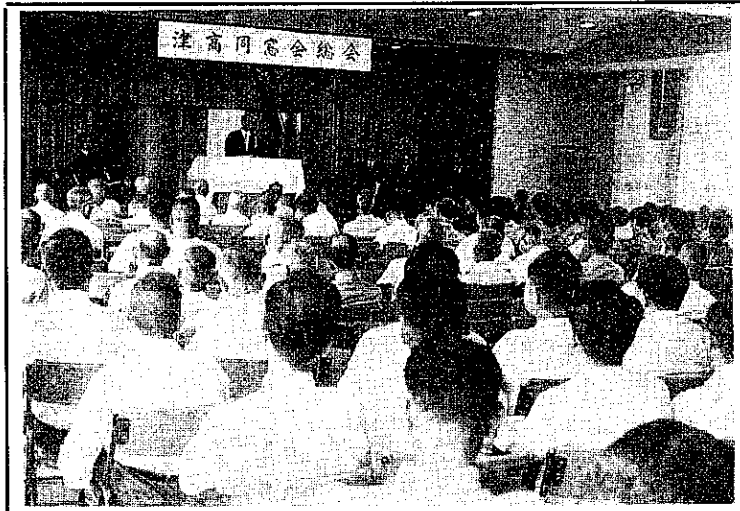
この日も暑さはさりながら昨年同様快晴に恵まる。既に開会一時間ほども前より、陳川、三重校など老会員の方々が、会場のあちこちに友愛みやる輪をつくり、歓談の花を咲かされていた。

午後一時五十分、本会実行委員長・富島利男氏（S20卒）より開会の辞。次いで往年の健児たちによる旧制津中校歌を皮切りに、旧制津高女、津高の順にて、それぞれの卒業生がそれぞれの校歌を誇り高く且つ声高らかに斉唱、いい知れぬ熱気場内を覆う。そのあと富島氏の号令にて一同起立黙祷をよ先生の御霊に捧ぐ黙祷を捧げ、次いで大観恰部会長（T13卒）の挨拶に入る。これにあって同会長は、まず七月水害の見舞挨拶をはなされ、本会への熱き支援に謝意を表されて後、会務に関するもろもろの件、新同窓会名簿発行の件、津高百年史編纂の件、終身会費等に関する件、松阪陳川親交会に関する件および竹島と先生に他界に伴う副会長の一部選出に関する件等につき、縷々詳細に述べられた末、当日との会に御来席の大阪同窓会長・野田吾造氏（M42卒）を一同に紹介、最後に会員の長寿、健康を祝い乾杯。

欠席ながに関して所信等を述べられ、最後に今後共一層よき伝統を活かし奮闘いたき旨の決意を表明、なお一層のバックアップを懇請して挨拶を結ばれた。

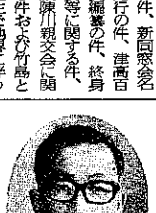
次に、新たに津市長となられし岡村初博氏（S15卒）より来賓としての懇々なる祝辞あり、東星同窓会長よりの祝電を披露、そのあと直ちに議長選出に入る。ここにおいて一昨年および昨年総会の名簿長たりし浅井政男氏（T8卒）をまたもや満場一致で議長に選出。それからはこの名簿長の手により議事は水の流るるがごとくスムーズに進行。まず島羽登氏（S29卒）より四十八年度事業報告ならびに会計報告あり、次いで三宅克世氏（S33卒）より会計監査報告がなされ、全員拍手でもって決算を承認。次いで北嶋一氏（S10卒）より四十九年度事業計画および予算案の説明あり、これまた拍手でもって承認、本案成立。次に役員一部改選に入り、新副会長として今村房氏（T12卒）ならびに佐々木小夫氏（T15卒）をこれに選出。かくて最後に、松阪陳川親交会会長・斉藤信一氏（T13年卒）を新たに参与に加えることを決定して、ここに午後一時五十分議事はすべて滞りなく終了。その後直ちに場所を転じて懇親会に。阿部春兵衛副会長（S4卒）よりパーティーの挨拶あり、一同欣然と思い思いに車を囲む。永劫輝き学灯のもと、老も若きも温然とビールの泡に酔い合いて友愛の熱気場に充ち、往年の意気燃えあがる。かくて大方が名残り惜しみつつ散会したは、暮るるにお草き年後四時少々前の頃であった。

（市川記）



津高百年史など

津高等学校長　小竹　惟



同窓会には、いつもながら大変お世話様になっております。喝わば老師の事みを持つ同窓会のお力添えは、私にとっては実にありがたいことで、感謝のほかありません。

本校は、昭和五十五年で、ちょうど創立百年になります。想えば長い道程ですが、その間に育ってきた本校の伝統は、まことに海がたい貴重なものであり、それが、明治、大正、昭和と百年の我が国発展の歴史の中で果してきた役割もまた実に大きいものがあると信じます。その間、本校を巣ぎられた先輩諸氏の各方面に輝かされた業績などは、実に校挙にいとまがないと思われます。

先般、この百年多数機に、校史を編さんし、その発展のあとを記録に残し、後世に伝えるという意義ある事業を、創立百年の記念事業の一環として行なうことになりました。去る八月の総会の際、大藪会長さんの御挨拶にもありましたように、同窓会としても大いに御助力いたすことになり、ありがとうございました。

この校史編さん事業は、創立九十年の機会に一度計画されましたが、完成をみるまでに至らなかったもので、今度の百年の機会には是非とも完成しなければならいつの日になるか、とてもその機は来ないものと存じます。勿論、学校としてとりくむ事業ですが、同窓会PTAともども絶大な御協力をお願いに御願い申し上げます。

「現在の津高は、校舎は旅だし、運動場も広い方だ。先生も頑張っているし、生徒も勉強する。三年間放りこんでおけばまあ安心だろう。大学へもかなり入るしゃないか……。」

「しかし、形は整っていても、実際はどうか。生徒が顔を知らない先生が居るし、先生に名前の分らない生徒も多くいる。教室にも校庭にも生徒が満ち満ちて、何をするにも中途はんぱ、挨拶も排除も行き届かない。これでは、その日を過ごしていくだけが精一杯で、希望も意欲も母校愛も出て来ないだろう。」

日々の皆の努力もさることながら、津高のマンモス規模はどうしても解消しなければ教育効果はあがりません。これが現在の津高がかかえている最大の難問です。

全人教育の確立を

―会報に寄せて―

会長　大藪治郎

"かくて喧嘩十二月なる日のひかり"

戦争末期の第一人者として高く評価された、津高同窓会長谷川素逝氏の句を、ふと想い出す頃となりました。

茨瀬の多かった本年も後旨日で静かにその幕を閉じようとしています。想えば会員総会にご挨拶を申し上げてから早三年有余月の歳月が流れ去って行きました。この間大過なく今日を迎えましたことは偏に会員諸氏を始め関係各位の常に変らぬご鞭撻と協力の賜と深く感謝しております。

年頭に当たり（会報第十一号）当か人間教育に触れてみたのですが、その後の推移は私の予想以上に最悪の状態となって現われました。例えば、駅のロッカーが赤ん坊の墓場となり、子が親を平気で殺したり、爆薬を用いて不特定多数の人々を殺傷する等々……また国内のみでなく海外においても非人道的な問題を繰り返して日本人の評価を極端に下げるなど狂気の沙汰とのみではすまされないことと思います。この際思い切った法的措置の強化を実施すると同時に、家庭、学校、社会と三位一体的な全人教育の方策を講じて、この二者の歯車を完全に噛み合わすことが最も肝要であり、急務であると信じます。

仏教に"東漸"という言葉がある（次第に東へ進行）。釈尊によって教えの道が開かれた教が次第に東へ導み中国を経て日本へ伝来し、日本全土に大きく根を下し、大木となり枝葉を茂らせ、立派に開花し結実した。また中国から伝えられた儒教、或いは度々の迫害に屈せず伝導されたキリスト教何れも日本人の中に溶け込み、日本人の心の支柱となり、人間形成の上に大きな役割を果たして来たことは誰に承知の通りであります。

元来、日本人は他国のものを素直に受け入れ、それを何時の間にか自己のものとし、より以上に高めて行くことの出来る精神的な良き土壌を持った国民であった筈なのに、それが例え少数の人たちであったとしても、どうして非人道的なことを平然としてやってのける輩が多くなり下がったのかなぞ不思議であり、悲しいことでもあります。

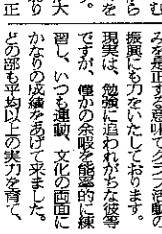
人間教育を原点に戻して全面的に徹し直し、第一歩から再出発するも重ねて強く提唱する次第であります。

後になりまして失礼ですが、六月二十二日、松阪陳川親交会九月二十五日、津高京都同窓会十月十七日、津高大阪同窓会十二月十四日、津高東京同窓会に先い直し、第一歩から再出発するも重ねて強く提唱する次第であります。

受験校らしからぬ明るさ

―学校の近況について―

教頭　三ツ村健吉



学校の近況をお知らせいたします。日頃は学校のため、何かとご指導やお力添えいただき有難う存じます。おかげをもちまして むずかしい情勢の中にありながら教員生徒ともども大過なく日々を送れることを感謝しております。

目下一、七〇〇余名の生徒が大学への進学を志し、頑張っております。学校といたしましては、正常な教育の実現を目指しながらも、生徒の当面の目的を達させやるために進学指導にそれなりの努力を傾けています。本年度の入試では、国立大学合格者数から見ると国公立という好成果を収めましたが、これに満足することなく、今後とも精進したいと考えております。

一方、受験への傾斜がもたす歪みを是正する意味でクラブ活動の振興にも力をいれたしております。現実は、勉強に追われがちな彼等ですが、俺かの余暇を能率的に練習し、いつも運動、文化の面面にかなりの成績をあげて来ました。どの部も平均以上の実力を育て、以上のように天々年次総会が開催されまして参会致しました。何れも夫々意義深く楽しいものでしたが、とくに大阪六名、東京五名（内女子三名）の大学在学中の諸君の参加を得たことは何よりの収穫である喜びでもありました。

各地区の会長様始め会員の皆様方へ誌上をかり失礼ながら慈に敬めの辱くお礼申し上げます。

なお、昭和五十年という大きな"節"となる総会を盛大に且つまた意義あるものに致したいと思いますので、一層のご協力をお願い申し上げます。

終わりに、同窓会関係の先生方会員ご一同様のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げまして擱筆致します。

（昭和四九・一二・一九）

本年度総会のお知らせ

本年度津高同窓会総会は、左記のように行われることになりましたのでお知らせします。議事終了後いくつかの会場にわかれて懇談会をもつことも考えられています。どうぞ多数ご来会下さい。

一、日　時　五十年八月三日（第一日曜日）午後一時半より

一、場　所　津商工会議所

なお三重桜部の総会はこれに先立って左記のように行われます。

一、日　時　五十年五月十一日（日）十時半より

一、会　場　三重県福祉会館（津駅東徒歩三分）

夏の県総合体育大会は、三重高四日市高についで第三位の成績をかちとりました。受験校といわれる学校は、ややもすると、灰色にとかく学園になりがちですが、こうした活動と伝統の間間違なく気にはまれて受験校らしからぬ明るくのびのびした気分（毎年多数の県外からの参観者があるが、その方達がよく洩らす言）が漂っています。私達にとっては一つの救いに感じられます。

私達は出来るかぎり、先輩各位の築かれた歴史を汚すまいと、それなりに努力しておりますが、何卒しましても、きびしい社会情勢の中にあって、他県に余り例を見ないマンモス校であることが苦痛の種であります。

偶々こうした時に、学校格差を解消する意味で学校群による総合選抜制が導入され、勢い、今までよりも広範に幅広い層の生徒を迎えることになりました。一層きめの細かな教育が要求されて来ますが、教師と生徒、又は生徒同志の密度の高い交流を明らかで来たマンモス校の規模を是正しないかぎり新制度をいかす道はないと信じます。すでに五年度は定数減の方向をうち出し、逐次適正化する見通しがつきましたが、現実にいろんな問題を孕んでいるこの変革期を大事にしなければと考えています。

相手校の津西高校・津の西北の丘陵地に位置し、鈴鹿の山脈と伊勢の海とにかこまれたいった自然の景かな高勝の地にあります。

郊の田園の中に環境のよさを誇って来たのも、すでに住宅の中に閉じこめられた感じで、さも広かったグランドもうみに新鮮さを覚えるこの頃でございます。たが幸いなことに経済界や市川の眺めは雄大で美しく、校舎の春を飾った桜は昔ながらに豊かな花をつけています。環境はたしかに変わりましたが、先輩各位の若い心を培った自然は生きております。この自然の環境と伝統のよさを末長く守りながら、新しい学校造りに一段の努力を傾けたいと存じます。変らぬご支援をお願いいたします。

新興の意気燃えています。完成時には、本校をしのぐようなりっぱな教育環境を備えることと思います。――とは、よい意味でのライバルとなって共存していき、せっかく発足した新制度の悪言を生かさねばと、前向きの姿勢で、この新しい変革を受けとめています。

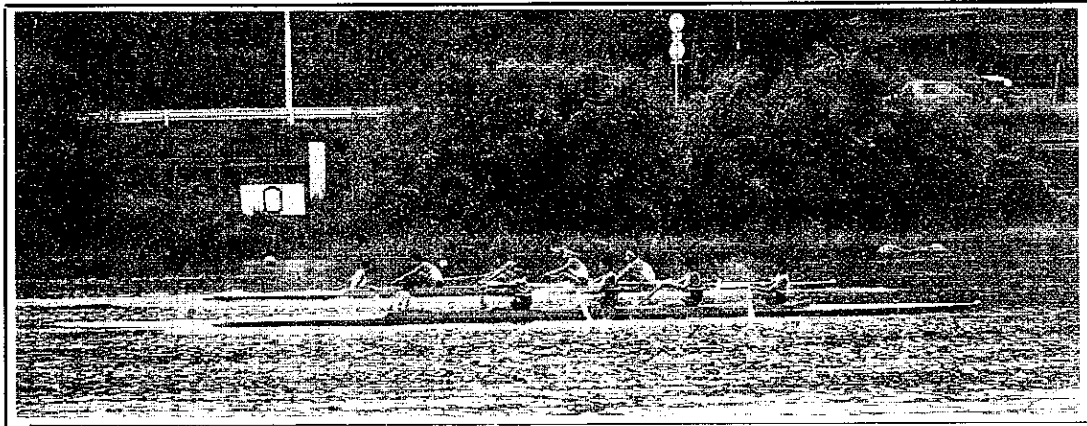
津高百年の歴史は、すでにいくつかの変遷を重ねて来ましたが、その都度、新しく姿を変えながら、それらを一貫して流れる力に支えられて来ました。伝統というものでしょうか。

今回の変革に当っても、職員、生徒ともって新しい創造に当っております。おそらく自信は持えない伝統の力によって支えられる所が多かろうと思い、今度からそんな伝統を築いてゆくべき先輩各位の偉大な存在に感謝する次第であります。

環境も変わりました。津市の西

全国高校総合体育大会に活躍

吉見君（弓道）とボート部



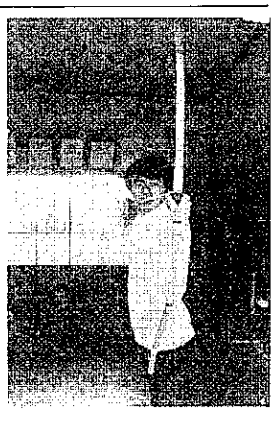
四十九年度の運動部活動状況をみてみると、弓道高校男子の部で高校総体第三位という輝かしい記録で入賞したことが、最大のトピックスとなっている。

一昨年の三重総体、本年度の三重国体と遠々ながら、県民のスポーツ熱の上昇にともない本校の運動部の活躍も目ざましいものがある。

剣道部、籠球部、軟式野球部などは、常に優勝または準優勝と常勝チームにあり、顧問の先生、生徒諸君の毎日の練習の成果の現われであろう。他に過去の好成績がよき伝統となり、地味ながら一歩一歩というところに、排球部、陸上部、卓球部、庭球部などがあり、その成績も遜かなる実現される日も近いように思われる。

部創設間もないシューティング部（エアー・ライフル）も、三重国体の強化の一環として本校に創られている。特に精神力と体力とを要求され、心身一体となっての集中力は、高度の技術を必要としている。すでに全国大会にも参加し、好成績をおさめている。

請先輩の一番なつかしい、そして伝統のあるボートは、ボート部OBや顧問のよき指導をえ、現在県内は無論、全国に脚光を浴びている。総合体育大会第六位の好成績の他、中日本大会、そして有名な朝日レガッタに出場し、三重国体での活躍を約束されている。部員は、元旦から合宿訓練に入り、上位入賞目ざして頑張っている。



以上が最近の運動部での活躍状況ですが、各部とも、先輩諸兄姉の暖かい応援は無論のこと、厳しい励しのことばを頂ければ勇気百倍、奮戦するに違いありませんので、機会があればぜひ、応援の程お願いいたします。

（紙谷記）

最近卒業生進路状況

—進路指導部—

四十九年三月卒業の者を中心に最近の卒業生の進路状況をお知らせします。

在籍数五六名（男二四三、女二二一）のうち進学四二八名（男二三六、女一九二）進学待ち二二七名（男一〇七、女一〇）就職九名（女九）家事従事一名（女一）といった状況でした。

この中で、進学待ちの二二名は大学に合格しながら浪人した者も含んだ人数です。本校が受験するのは、毎年かなり難関とされる大学が多いのですが、今回の主な大学への合格者数を二部表示しますと、東大に八名（うち浪人三名）京大に十九名（うち浪人六名）阪大に九名（うち浪人二名）地元の三重大に九十一名（うち浪人十六名）名古大に二十一名（うち浪人七名）静岡大に二十一名（うち浪人六名）早稲田に五十九名（うち浪人二十六名）慶応大に四十四名（うち浪人二十一名）同志社大に八十一名（うち浪人二十八名）立命館に七十一名（うち浪人三十名）等々といった具合でした。

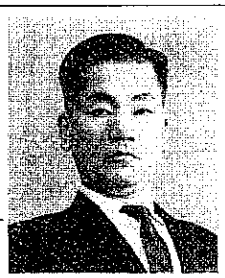
般近はご承知のように、いろいろな面において大学入試に関する問題点が指摘され、国立大学共通第一次テスト、国立大一期校、二期校入試期日の一本化の問題等、大学入試の流れそのものをも大きく変えようとする動きもみられますが、学校といたしましては、いろんな情報を的確に把握するよう努めながら、一人でも多くの生徒が希望する大学へ入学できますよう、指導の万全を期したく思っております。

次に就職について申しますと、今回も本校を卒業してすぐ就職した者は例年同様少なく、女九名でした。その就職先は、中部電力、東海銀行、大和証券、三交不動産、日本航空、千代田生命、第一生命近畿日本ツーリストといったところでした。本校卒業者は就職先で信用も厚く、その評判もなかなか良いようで、学校としましても、非常に嬉しく思っています。

五十年三月卒業生で、就職希望者二名（女子）のうち一名は就職が既に内定し、五五二名が大学を受験いたします。就職または進学の希望者が先輩の指導方にいろろお世話をおかけすることになると思いますが、どうかよろしくお願いいたします。

（進学指導係記）

作詞者　平岡良三（昭20卒）



〔寮　歌〕

一、阿漕の海の潮騒に
春や昔の返り来む
波間に月の照り添いて
かの千鳥啼くタには
人春秋の思いあり

二、銀波の世の消え行けば
駿馬の功は非ずとも
流離尽く夏の日や
稚ける山に上り見て
気高く理想の道を問ふ

三、雁ヶ音秋を告げしより
世は清明の時迎ふ
考へも人の永らえて
秋天一如獲を為す
此の感慨正に確なり

四、嶺々として風わたる
冬の日毎を作びぬれば
薄れ行く日を惜しむより
簡明の語を信ずべく
春尚上の野に出でん

〔寮　歌〕

一、阿漕の山の花散りて
斬く向陽の時来る
経て多山に渡るかなる
緑霞める伊勢の野に
端正の日の歩を歩ゆむ
此の行く方何れかや

二、清冽天に通って
鉄崎の海清々し
今落暁の有らなくも
昔伝る此の土地に
聞くは優雅の波の曲
かの先人を慕はずや

三、大合の星影さえて
永劫の水に映したり
殿堂の夜は深りして
その星影に祈りさは
万里荒峰の身に非ず
啓示は胸にひかるかな

〔漕　艇〕

一、再び春の海に出で
水路の岸に船を曳
倒覆の憂は淡らぎ
敵艦の花に憧れし
潮騒奢の力漕に
雪の天怖さまじ

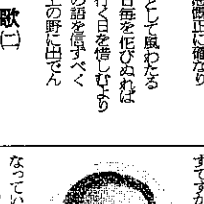
二、水明花に先駆げて
紫の水泡べたり
緑渺として海広し
行く方はいづこ海の涯
何れ明潮の浜千鳥
なる豪傑の波の有りや

三、晴天万事融気より
早や展頭に日は輝りぬ
鍛えし日毎を後にして
空行く雲と競はなん

〔陸上競技〕

一、晴天万事融気より
早や展頭に日は輝りぬ
鍛えし日毎を後にして
空行く雲と競はなん

また同窓会誌に出る季節となりました。お年元に寄へるのは、すでに七十五年も二万日過ぎているはずですが、その時、どんな社会になっているか、ふとそんな事を考えます。会員の中には、静かに余生を楽しんでおられる方、第一線



で活躍の方、夢をもって人生に出発しようという若い方々と、いろいろあろうと思いますが、いずれにしても生きにくい時代であることは同様です。こんな時にこそ、私は同窓会のあり方、あるべき姿を思うのです。同窓会員にいうことで、老も若きも遠慮なく相談でき、援助しあえる母国気分溢れる同窓会にしみなきゃ、これには役員としても努力しなければならないし、会員一人一人も大いに甘えるべき先輩、同窓に甘えてもいいのではないかと考えております。

商同窓会にしみなきゃ、これには役員としても努力しなければならないし、会員一人一人も大いに甘えるべき先輩、同窓に甘えてもいいのではないかと考えております。

甘えられる雰囲気に

副会長　阿部喜兵衛

わたくしは昭和四年本校で、昭四会の一員。よく集り、旧交を温めております。八月十一日にも浜新鮮料亭「綾」で開催し、出席者

海

海上自衛隊・海将補
昭和11年四年修了
中村悌次

白子の浜で育ち、にぎやかの海で鍛えられているうちに、何時しか海軍に憧れ、希望を達してからもう四十年近くになった。

眠ったような春の海、……
……
その海は音もなく流れている。遥かく霧海に大鷲をも木の葉のようにもてあそぶ海、やがてゆるりと吸まって母のように抱いてくれる。夜光虫の色鮮やかな夜の海、一すじ一すじ、昇る太陽から流れ出す真赤な色に染められた暁の海、澄み切った秋いっぱいの空の下、押しつぶされそうな北の海、いくそもく、いくらでも海の姿は変幻に富んでいる。

海の姿は、いつも変ってとまるところを知らない。海は果てしなく大きい。海は素晴らしくそして恐ろしい。

昔の人は、海の中に限りなき夢とロマンを画いた。科学技術の進んだ現代でも、海にはまだ幾多の究明されていないものがあり、大自然の威力と不可思議さを、しみじみ思わずにはおられない。

……
……
海に親しみ、海に泳ぎ、海にもまれて五十年、わが人生に悔いはない。

陳川でともに学んだ級友の半数は、大陸に、海原に、散っていった、江田島の同期の桜は七割が太平洋を血潮で染めた。

敗戦の廃墟の中から不死鳥のように立ち上り、今日の経済的繁栄を築いたわが民族のバイタリティを疑う人はいないであろう。しかし、近頃では海国という言葉もあまり聞かず、マイホーム一辺倒のもとでは、海の仕事を望む人も少ない。所詮人間は陸上の動物である。日本の経済が六億トンを超す輸入原材料等に支えられ、海洋開発が明日の日本のもっとも大きな光明であることを知る人も、あまり多いとはいえない。まして、

現代大学生気質

森田　明（昭十四卒）

私は昭和十四年旧津中を経て（経）へ進み、旧八高を経て東大（経）へ進み、三年生の時第一回の学徒動員令により、復員後、所謂暗い谷間を経た世代として監獄有為、只今三重学生会館を経営して、東京住宅の麓下の大学生諸君約六十名と生活を共にしています。大学はその学部共々様々ですが、津高、四高、伊勢高の出身が大多数です。

現在の大学生は何を考えているのでしょうか——昭和四十三、四年の大学紛争盛んなりし頃、私も母校の郷愁というよりもヤン馬根性と任侠精神、東大安田講堂攻防戦、その後、左翼眼の学生に貧民正に新勢の舞台を見るようにドラマティックでした。その感慨はともかくその後はゲバルトもなくなり、只今は学園紛争もなく天下太平です。ゲバルトは勿論ナンセンスですが、求人難に伴う就職の心配がないという〝迷正め〟の安心感からか、本は読まず、麻雀ばかりしているようで何を考えているのか解りません。学生運動はともかくとして日米安保改定の時だけでなく、ヌーベルバーグは戦前から大学の中で誕生したはずです。現代絵画観が多様であり、又変化が激しく環境資源、物価、教育問題等様々と身近に大きな社会的問題が迫っている以上、考えることも多いはずです。他面それでは行動的であるのかと考えてみると、一見行動的であるようですが、それは学度車が増加したのと同じように、機械的な行動のようです。例えば学生の旅行も泊に暮んですが、〝倉敷〟へ旅しても大原美術館モネーやシスレーの絵を観てきているわけですが、これらは貧出しされて東京のどこかの美術館で展示されるのです。倉敷は近代日本資本主義の発展過程及びその遺産として評価されるべきで、倉敷風景を見てくるだけでは、失礼ながら〝馬鹿さん〟の旅行と少しも変りません。テレビの視覚に馴れた諸君は感覚的となり即物的にしかも考えようとしないから、往年の禁を破り自由とは異う意識された限価風潮に走っています。男女共学で訓練された諸君が、ボーイフレンド・ガールフレンドを結婚的に結婚を結びつけ、そこには〝マドンナ〟や〝野菊の如き君〟のロマンもなく、若きウェルテルの悩みとして受け止めておく予猶はないのでしょうか。

大学で学問するほど、リーダー階層として社会的、政治的関心をもつ人に、これらを抱懐しまとめる能力をもつことに感謝があると考えます。同世代の約三分の一が大学生となっている現在、大学は出たけれど……と往年とは異った環境で文字通り考えざるを得ない状況になっています。今度文部大臣に永井道雄氏を迎えたことは新しい考え方の一つの転機としてのきたいものです。（学生諸君はコレに答えて関心はないようで……平和なことです。）

〈ボート部短信〉

津高の数あるクラブの中で少数の部に指定を受けているクラブの一つにボート部はなっている。

今年で三回目地元ボート部代表となり、学校、三重県の名誉をかけて、例年になく緊張の中であり、その成果も上々、必ずや学及、先輩、県民の期待に応えるものと信じています。

一年生はまだまだのクルーですが、体力体格もよく、選手向き進んで練習している。

八月上旬のインターハイは勿論オープン戦に出る朝日レガッタ中日本レガッタ等で浜勝三位以内を達成すれば、挙って前指援を乞う。

（ボート部顧問田中）

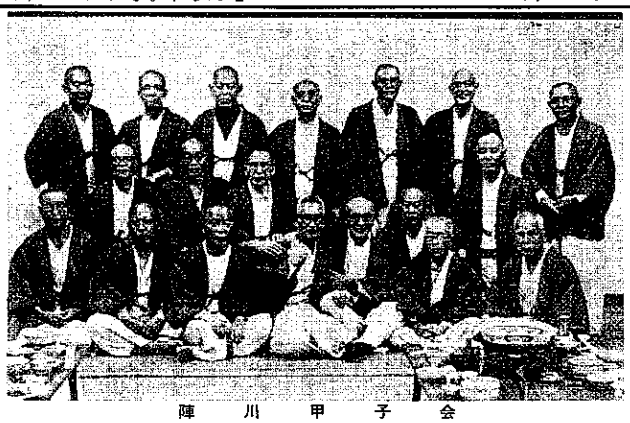
……平和なことです。）

三百名をこす参列者

竹島先生追悼会及び昭和四十九年総会報告

今村 房

昨年四月二十一日三重稜総会を津市一身田町高田本山で開催いたしました。総会に先だち、一昨年暮れに亡くなられました竹島先生の追悼会をいたしましたところ、三百名をこす多数のご参列があって先生のご遺徳の偲と感激いたしました。早朝差方からは浦畑元校長先生をはじめ中込先生もご出席下さいました。津高同窓会からは阿部副会長、津高教頭三ツ村先生その他旧師の長坂先生、伊達先生、小川先生、井上先生、本庄先生、別所先生らが参会なさいました。東京から浜崎支部長をお迎えしました。高本山本堂でしめやかな追悼式は厳粛にお元気だった頃の先生のお写真をかかげ、読経はじまり、追悼の辞、ご遺族お令嬢のご挨拶、参列者一同次々と焼香がつづきました。最後に常磐井門様のご話をいただきほんとうにしんみりした追悼会できました。



陣川甲子会

その後、席を移して高田青少年会館で四十九年度の総会を開催いたしました。役員を改選し、次のように決定いたしました。

会長 今村 房
副会長 佐々木かよ
会計 横方千枝子、菊岡 静子
書記 綿田 静子 伊藤ミヤ子
会計監査 山路 きよ
常任幹事 山崎 はつ、浜口登代子
宮田 幸恵、谷 厚子
村木美代子、黒宮 登子
山田 郁子

岡山からご出席下さいました高畑先生は昔に変らず、お元気でご近況をお話し下さいました。そのあと中込先生も、おやさしいお声でお話をいただきましたが、そのお帰り道でお怪我をなさいました。各先生からお祝辞をいただき会終わって講堂一ぱいの会員が共々中食をいたしました。その後、あちこちで、各々クラスの方々が集まって歓談したり、また二筆を借りて、クラス会に花を咲かせたり、賑やかな総会で、また来年の会を約して時過ぎ解散いたしましたが、この会には、一身田町の会員の皆様に大変お世話になりましたことを、ここに厚くお礼申し上げます。

竹島とよ先生を憶う

高畑 浅次郎

私が竹島先生を知ったのは、私が六年生春、千葉県から三重県師範附小主事に転任して間もない頃であったかと思う。当時は県女は清水校長、草川先生の時代で、竹島先生は若い先生であった。五十余年前のことである。

しかし、附小から県女に進学させることが大事な仕事だったので、当時の附小の副導は気をもんだものであった。私もそんなことで県女には関心が深かった。大正末期、昭和の初頃の津高女の卒業生の中には附小で私が教えた方が大分おられる。私は師範から大正十四年に上野中学校長となり、昭和六年、三重県視学官となり、昭和八年、宇治山田中学校長となって十数年三重県に在任していたが、この間は竹島先生にあうことは殆んどなかったようだが、昭和十二年春、不図先生と同町であることになったのである。先生は長女卒業して奈良女高師に入学、卒業、母校に転任せられ、一度も校に転任せられず母校一校に尽瘁せられ、私の教師として、学校全体における存在であられた。支那事変から太平洋戦時代における女子教育、特に統制ある津高女教育に女子教育一筋の経験のない私が校長になったので、私は随分竹島先生に相談、間接、我、裏からお世話になったことをしのぶ。

私は昭和十七年末、岡山県に転任したので、それからは時々津に参った際先生にあっていたが、戦後、津中と津女が一緒となり津高となってからは先生は終始母校の柱となられ、全く対等合併の実を挙げられ、津女、三重稜の存在を明かにされた功績は、五十余年間における母校にさげられた業績と共に偉大であって、三重稜の関係者一同驚嘆、感謝しなければならないと思う。私はその後、三重稜同窓会や県支部会、或いは東京から名古屋、三重県から十三名関西から八名でした。

先づ先生の米寿のお祝を申し上げ、御夫婦がいつまでもお若くお元気でありますようにと、お祈り申し上げました。そして私たち一同も元気に等身大出席出来たことをよろこび合いました。食べることしゃべることに忙しく時のたつのも忘れて本当に楽しい会でした。鬼頭さん、即席の一句、

自粛なる師を祝いし極楽薬
四時、十名別れをおしみながら帰宅。残る人は先生と二人で一緒に小豆島にわたりました。

五月十二日、快晴にめぐまれ、バスにゆられ小豆島を観光しました。先生は昔と変らぬお若さで私たちも三十五年前に帰ってワイワイガヤガヤと大はしゃぎ、本当に楽しい楽しい修学旅行でした。

十四時四十分小豆島発、天気晴朗にして波静かな瀬戸内海の母旅もあっという間でした。

十七時四十分神戸着、来年を約して散会しました。幹事さん御苦労様でした。

なお、今まで母の日が一番出易く、その日をクラス会に当っていましたが、来年からは別の日に集まることになりました。母の日には娘さんや、お孫さんが帰って来られるからだそうです。（なんとパパアになったこと！）

お元気なお顔を皆様方に来るのを楽しみにしております。

◎三重稜の方に執筆をお願いしておりました「高畑先生の思い出」又は「米寿をお祝いすることば」共に十一月始めにはしめが先生のところへ発送致しました。今後お書きになる方は直接先生のところへお送り下さい。

三原鈴子（20回）記

卒業満五十年の集い

陳川甲子会

陳川甲子会（大正十二年卒）では、卒業満五十年を迎え、十月二十七日、鉛温の湯の山温泉、御在所山上ホテルで懇親会を開催して一泊。翌二十八日は津市寺町、天然寺において物故者四十人その慰霊祭を行った。

卒業以来五十年振りで顔をあわす者もあり、往時を偲んで、恩師や級友の懐旧談に花が咲き、夜の更けるのを忘れて歓談した。

今年は五十周年でもあったので東京、豊川、名古屋、京都、兵庫及び高知と県外から八名の参加があり、両日を通して二十二名出席して盛会であった。

（町谷源蔵記）

（出席者）
岩崎竜重、杉谷義己、藤田忠男、大鍬治郎、鈴木孝太郎、町谷源蔵、金子安雄、中島義之輔、宮本雷郎、川辺鶴孝、西村 猛、山田信夫、草野実、長谷川恵一、山田守十郎、坂倉茂俊、長谷川芳郎、吉村英一、浜野敏郎、樋口芳世、吉村圭石。

高畑校長先生の米寿を祝って岡山でクラス会

S 14 卒 松組

恒年母の日に集まります私共のクラス会を、本年は「高畑先生の米寿をお祝いする会」を兼ねて岡山で催しました。

五月十一日、大そうむし暑い日でした。十二時二十分、岡山駅へ集合、わざわざお迎えくださった高畑先生とごいっしょに倉敷を見学しました。軒を並べた美術館・民芸館・絵画館等、午後の二、三時間では歩き廻るだけが精一杯でとても美術観賞とまではゆきませんでした。四時閉館では早すぎるとのことで、ブツブツ……。

「まだ時間はあるぞドンガドン」と、それから自動車に分乗して、鷲羽山まで夕方のドライブをたのしみました。午後七時プラザホテル着。

五月十二日、朝食の後、有志の句の懇親会を敢歩する人、ホテルのロビーで話し興ずる人、同じロビーの片隅で会計に頭をなやます人、それぞれの時間を過ごし十一時からクラス会に入りました。当日の出席者は、先生御夫婦

竹島とよ先生を憶う

高畑 浅次郎

たようだが、昭和十二年春、不図も津高女校長に任命されて、竹島先生と同町であることになったのである。先生は長女卒業して奈良女高師に入学、卒業、母校に転任せられ、一度も校に転任せられず母校一校に尽瘁せられ、私の教師として、学校全体における存在であられた。支那事変から太平洋戦時代における女子教育、特に統制ある津高女教育に女子教育一筋の経験のない私が校長になったので、私は随分竹島先生に相談、間接、我、裏からお世話になったことをしのぶ。

私は昭和十七年末、岡山県に転任したので、それからは時々津に参った際先生にあっていたが、戦後、津中と津女が一緒となり津高となってからは先生は終始母校の柱となられ、全く対等合併の実を挙げられ、津女、三重稜の存在を明かにされた功績は、五十余年間における母校にさげられた業績と共に偉大であって、三重稜の関係者一同驚嘆、感謝しなければならないと思う。私はその後、三重稜同窓会や県支部会、或いは東京支部会に出席して先輩初め諸先生に御目にかかったが、竹島先生の元気な姿を見たことが最後になろうとは夢にも思わなかったが、先生は遂に十二月十五日急逝されたことを長谷川さんから電話で承って驚愕悲嘆の極み、哀惜の限りを尽くし、深く哀悼申し上げ次第である。私は今年正月五日、先生宅に参り、霊前に額づき、故生前中永の功績を敬謝し、ご遺族のご冥福を感謝いたし、お妹さんに御悔みした。去る四月二十一日、高田本山でなされた竹島先生追悼会に参詣して皆さんとともに先生をしのび、ご冥福をお祈り申し上げた。私の一つの願いは、津高校内に竹島先生の遺徳をしのぶに足る何等かの記念的金をして頂きたいことである。（因に八十年間の一生を母校につくした教育者は恐らく稀だと存するからである。）

「磯月人を待たず」という古人のことばのとおり、竹島先生が逝かれてから早くも一年を迎えます。

先生のお顔もお声もまだ私には色濃く残っていますのに。

先日、私は教室で大失敗をいたしました。と申しますのは、中学一年の授業をしていました時のことです。ペラペラと天声で講義をしていましたら、突然、前歯が一本コロリと抜け落ちたのです。さぞ笑いたったのです。ハッメノ思いしましたが、どうしようもありません。不幸中の幸いと申しましょうか、歯は口の中で止まりましたが、どうにもあとのことは手に負えなくなりました。前列の席の生徒は気がついて、「先生、どうしたの」と見上げています。うしろの方はわけのわからない顔で、突然教壇の上で口を抑えて黙りこんだ教師のようすに見とれています。そのうちにさわぎわとし出しました。仕方なく口を抑えたままで、すばやく抜けた歯をポケットにしまい込みながら「落ち着いたの」と申しました。折しも十月、生徒の中には勘の良いのがたくさんいます。「先生、シャレやなあ」「先生、秋やもんなあ」とか、現代っ子たちは明かるいです。うまく教師の威厳を救ってくれました。私は快調に後半の授業を終えて戻りました。そして、ふと、竹島先生の入れ歯がカクンとはずれた日のことを思い出していました。

あれはたしか女学校の一年ごろだったと思います。何かの授業中だったようですが、大きな口をあけておかしどうにお笑いになった先生の、上の入れ歯がカクンとはずれて、その何とも間のびをした顔に、一瞬、驚いた私でした。

私はチビでしたから、一番前の席に坐っていましたので、はっきりと印象づけられてしまったのでしょう。でも、その時、あんまり瞬間のできごとでもありましたし、すぐにもとのお顔に戻られましたので、教室の大勢には殆んどわからずに済んでしまいました。

先生は通の好いお方だったのだと思います。いま、先生が生きておいでだったら、さっそくお伺いして、このシマラナイ「落ち歯」の話を申し上げて笑っていただけるのに、なつかしくもまた、さみしくも思ったことでした。いつの間にか私も、あの頃の先生のお年に近づいていたのです。

教壇に立ちますと、チビでありながら教室を一望できます。高校生ともなると、昨今の先徒は背丈がよく伸びていますので、教壇がなければ、ばとでもみじめなのです。

一望はよいのですが、とても気になるのが最前列。中でもかつて自分の坐っていたあたり。教卓の左右は何とも講義のやりにくい視角です。何しろ真下から顔を眺められるわけですから。古典の授業なので、「伊勢物語」なぞもすとき、すぐ眼の下で、ニキビ面した紅顔の少年がニヤニヤしながらじっと見上げていてくれると、まったくやりにくいものです。

そういえば昔、川崎先生（現在竹内先生）に国語を教わった頃「あまりじろじろ見上げるな。やりにくい。」と、おっしゃったことがありましたが、今にして先生のお気持ちもよくわかります。あの頃先生はまだ独身でいらっしゃった。でも、今の私にとって、下からじろじろまぢに見られることは、シワの数数えられそうに思えてあわてます。やはり、「三尺下がって……。」と教えた古人は偉かったと思うことしきりです。

よく「子どもを見れば親がわかる」と言われます。子どもは親の小型みたいなところがあるようです。そういう投影が、先生と生徒にもあるのではないかしらと考えることがあります。実におかしいと思います。別にまねをしているという意識もなくて、教壇の自分の姿にハッとする時があります。女学校時代に教えていただいた先生のせりふを、そのまま受け売りしていることがあるのです。

戦争末期に学徒動員され、工場訓練生という状態で、連日連夜の強制労働に、朝えにおびえていたとき「本を読みなさい。少しでも眠を見つけて本を読むこと。いつ死ぬかわからないからね。どんな本でも良い、本を読んで自分を豊かにしておきなさい。」と、教えて下さった故伊藤先生のお口ぶりが、いつかそのまま私にのり移って、そっくりにしゃべっている自分に気がつきます。乏しい自分の生活経験では、とても処理しきれない現代国語の教材をこなすには、私の場合、伊藤先生のような純粋な気持ちで生徒に読書を勧めているだけではありませんが、しかし、そのせいかそっくりなのに驚きかつ、うっぱな、有り難い先生であったと、今さらながら先生の御恩が惜しまれてなりません。

思いかけず歩き出しましたこの道ですが、十五年の過程の喪に生徒に映る自分の影の中から、なつかしい先方のお姿やおことばがはっきりと浮かんできますのはたのしいことです。

それはちょうど、朝毎に用います合わせ鏡のようで、自分の横顔を映してのぞいているような気持ちなのです。

（高田学苑教諭）
（昭二〇年竹組卒）

〈随想〉

合わせ鏡

福島 和代

（昭20卒）

母校の歴史 (9)

女学校の創立

真弓六一 (S17)

県女の巻

明治五年 わが国女学校の嚆矢(こうし)である東京女学校が開設されたが、同年四月には京都府に英女学校が設けられ、ついで東京女子師範学校が開校した。その七十一、二年ごろまでに栃木、山梨、岐阜、鹿島、鹿児島の諸県にも女学校が設置され、女子教育の曙(しょ)光がようやく見えはじめたのであった。

本県における女子教育は、二十年に当時の知事・石井邦猷(くにみち)がその必要を唱導したことから、女学校設立の動きが活発となり、華族・常盤豁子、知事夫人・石井勢子らが発起し、河原田俊蔵、林忠恕らが創立委員となって、同年一月、安濃郡津(津市)丸之内に私立三重女学校が創立された。同校の教科は本科が修身、国語、英語、家政、算術、幾何、地理、歴史、理科、図画、唱歌、礼節の十二科目とされ、別科には絵画、和服裁縫、洋服裁縫、刺繍(しゅう)、綾(りょう)物、西洋料理、染法の七科目がおかれた。修学年限は本科三年、別科が科目選択の都合で二年、一年、半年とされ、教員には女子師範学科卒業者、英学修学者、漢学修学者、漢学書法の修学者、刺繍科修学者、和洋裁縫修学者のそれぞれ一人づつ、うち女子一人を含む計七人であった。ところで、当初入学生徒は本科七十二人、別科二十三人あり、殺風景もない状態であったにもかかわらず、学業は目ざましく進み、その学業は数年を経ずして見るべきものがあると判断されたのであった。

当時校長格は尚原由敬があたって経営にあたり、学校経費は授業料として一人一カ年四円四十銭程度を徴収してこれにあった。

同校はその後津市女学校と改称されたが連年継続し、三十二年には教科目も高等女学校に準ずる内容となり、校舎、教具などの設備も整い、教員も男女それぞれ十人生徒も百八十七人に増加したので、際上の問題としても無理(ひ)の急である。と説明した。

ついで県側から、津市女学校の建物七棟および付属物、建家百八十三坪七合五勺(六百六平方メートル)を、県高等女学校設立のため譲受けるものとす。という議案が提出されたが、これ対し員弁郡選出の石井四郎議員らから、県の経費過(ひつ)迫の折柄、殺立は一年延期せよとの意見がだされ予算案とも調査委員に付託となった。

さて注目の調査報告によると、

予想されたとおり高等女学校費は削除されており、同委員の一人である度会郡選出の村井信盛議員によると、女子教育は一刻も遅らすべきでなく、万難を排して開設せよとの意見もあったが、何だかも三十一年一挙に中学校(注・第一第三、第四の各尋常中学校)を増設した結果、県財政は容易なる殺磨に陥った。このため高等女学校費の補助を中止することによって、女子教育を同校で進展させることにしたとの説明があった。津市女学校の補助額については盛田中小の八百円では少額ゆえ、千五百円以上二千円以下の程度を適当と考えるとの答弁があったが、県、一県に一校設置が義務づけられることになった。ところが津市女学校は名種学校であり、従って教員にも高等女学校教員の資格なくそのうえ校舎も未完成である。これを県立移管する計画であるが同校設備を一挙に整備することは困難であるから、三十四年度はとりあえず一百人を収容する予算編成とした。また、高等女学校では寄宿舎が必要で、同舎で勉学できるようにする計画であり、これも一、二年のうちに完成させる考えで、これにより定員四百人の収容が可能となる。以上支部省の設置規準に合致する計画を実現するためには、津市女学校の校舎では不足で、今後の整備に待つほかなく当面三千三百度追加工事として、二教室の増築を実施する考えであると述べた。

その結果、例により調査委員会に付託されることになったが、ついで津市女学校設置受諾案が提出され、建物八棟および付属物、建家百九十一坪三合(六百三十五平方メートル)を、県高等女学校用として譲受けるという内容の審議に入ったが、これには「本件ノ建物、津市女学校設立大綱代ヨリ県立高等女学校設立ノ上、同校用ニ寄附ヲコトヲ条件トスル」という理由がつけられていた。ここで問題となったのは、県有財産中へ寄附するという行為に対し、「譲受ケ」というのは納得できぬというのであったが、当時「県側」によれば、寄附を受けることを譲受けという明文となっており、県高等女学校の場合も、別に譲渡条件がつけられたのではないという県側の答弁が全議員に了解され、これも前同様調査委員に付託となった。

ところで同委員会の調査報告は両案とも原案どおりということであったから、本会議は原案どおり可決した。

つづいて、県会は臨時部教育費第一読会として、二千二百三十五円三十一銭の高等女学校費審議に入ったが、これが教室増築に当てられる経費で、その位置は譲受け校舎の南隣に予定されていた。当時津市女学校の界隈には土地がありそれを埋め現の校地を拡張する計画であり、この工事は藤重家が負担することになっていた。

これに関して三重郡選出の藤重信議員から、二千百三十三円五十四銭四厘とする修正案がだされ審議の結果これは他の教育諸費との均衡上からも削減したいという意向が強く、ついで別途統部教育費として提案されていた、七百六十四円三十一銭二厘の高等女学校費審議も異議なく終わり、ここに連年の懸案であった県高等女学校設立の関係議案は滞りなく可決したのであった。

以上の経緯による高等女学校設立が確定すると、県では早速津市女学校裏の拡張敷地に、長さ十一間(十九・八メートル)、幅六間(十・八メートル)の校舎一棟の建築にとりかかった。一方、文部省に対して三十四年度から開校の届(りん)申を行った結果、松田正久大臣名で、設置ならびに位置選定の件、校舎、寄宿舎の借用と教室新築の件、学則ならびに授業料規則の件が、翌三十四年一月認可になった。

認可内容によると、名称は三重県高等女学校、生徒定員四百人、但し三十四年度は一百人とされ、学則第一条本校の学科は本科、補習科および裁縫修科とすとされていた。

ところで、本科規則は修学年数四カ年で、学科目は修身、国語、外国語、歴史、地理、数学、理科家事、裁縫、習字、図画、音楽、体操と、臨時科目として漢文、手芸を加えるとされたが、外国語は生徒の希望で実施しないこともあるとされ、また、作法、家事、音楽の二部として一週に一回もしくは数回、茶道、挿花、箏曲の科目を教えることがあるとされた。入学資格は品行端正、身体健全な満十二歳以上の者で、高等小学校第一学年の課程を修了した者、またはこれと同等以上の学力ある者とされた。

本科課程としては、修身が第一学年、第二学年とも一週一時間で三年、四年はそれぞれ一時間、内容は全学年とも人倫道徳の要旨と作法となっており、国語は全学年とも一週四時間で、一、二年が講読と作文、三、四年が同上と文法とされた。外国語は法語で全学年三時間、一、二年が綴方、訳習字、書取、会話、三、四年が読本、訳文、会話、文法、作文、歴史は一、二年が一時間で本邦歴史、地理は全学年一時間で、一、二年が本邦地理、三年外国地理、四年外国地理、数学は、一、二年三時間、三、四年一時間で、一年が筆算の整数、分数、小数、二年筆算で比例、百分算、三年筆算で求積、幾何の初歩、それぞれ珠算で加減乗除、理科は全学年一時間で、一年植物、動物、二年化学、衛生、家事は三年一時間で衣食住、四年一時間で育児法、看護法、救急法、家計簿記、御茶(ぼう)、裁縫は全学年時間で、一、二年通常衣服の縫い方、整ち方、三、四年同上と積い方、習字は一、二年が一時間、三、四年一時間で、一年横(かい)、二年行書、三、四年仮名交ぜり草書、図画は全学年一時間で自在画、音楽は全学年一時間で、一、二年が単音唱歌、三、四年が同上と複音唱歌、体操は全学年一時間で普通体操と遊戯、漢文は、三、四年一時間で講読、手芸は全学年一時間で刺繍(しゅう)と綾(りょう)物となっていた。この各学年合計時間数はいずれも一週二十時間となっており、但書として外国語、漢文、手芸のうち、一科以上修学しない場合は、その時間数を家事、裁縫に充当するとなっていた。

つぎに、補習科は一カ年の修学年限で、学科目は修身、国語、外国語、数学、家事、裁縫、習字、図画、音楽、体操、漢文、教育、手芸となっており、一週間教授時間配科目それぞれ一時間、三時間三時間、二時間、二時間、五時間一時間、二時間、二時間、一時間二時間、一時間の計三十時間となっていた。

また、技芸専修科は修学年限三カ年で、学科目は修身、国語、算術、家事、裁縫、手芸で、時間数は一年がそれぞれ一時間、三時間一時間、一時間、十八時間、六時間で家事はなく、二年が一時間、三時間、一時間、十八時間、五時間、三時間、三年が一時間、二時間、二時間、一時間、十八時間、五時間の計三十時間とされていた。そして同専修科の場合、作法、家事の一部として一週に一回以上それぞれ計三十時間となっていた。また、入学資格は満年齢十三歳以上で、高等小学校第一学年の課程を修了した者、これと同等以上の学力ある者とされた。

つぎに技芸専修科規定として、本科技芸専修科三年級とされ、一カ月全て出席しない者は徴収するとし理由なく一カ月滞納した者は学籍から除くとされた。

寄宿舎規則では、舎生は徒歩日に舎監の許可を受けた場合、一回以上帰省、外出が許されるとし、これ以外に止むを得ない事故で半日以内の外出が許されるとし、これ以外に止むを得ない場合は、保護人もしくは兄弟(なつ)印の願書を提出すべしとされた。また、金銭はすべて舎監に預け、必要の都度受取るべしとされ新聞、雑誌をはじめ、課業の参考以外の書籍は、校長の許可なければ携帯したり購読してはならないとされた。また、舎生を数組に分け、そのなかから組長、寄長を選んで、組内の親睦(ぼく)をはかるよう命ぜられた。なお、津市外の通学生で同市内とか、同市近傍に寄宿しようとする者は、校長の許可を受くべしとされた。

さて、学校では以上の諸規則を三十四年三月十三日、県会第二十号で定められると、四月の開校をめざして入学試験の準備にとりかかった。

その結果、本科第一学年の入学志願者は五十一人あり、この全員が無試験入学を許可されたが、その入学前教育程度は高等小学二年修了が六人、二十四人、高等小学卒業が一人、高等小学卒業が一人、高等女学校一学年在学が一人、尋常小学校補習科修了で津市女学校在学が十九人であり、その年齢は現在長者が十八歳五カ月、最年少十二歳、平均十二歳五カ月となっていた。一方、技芸専修科は一学年の一学級のみ募集したのであったが、応募者は予定数に達せず、入学志願者が二十四人で、これも全員が無試験入学となった。この入学前教育程度は高等小学二年修了が五人、高等小学卒業が六人、高等女学校一年在学が一人、尋常小学校補習科修了で津市女学校在学が十八歳九カ月、最年少十二歳一カ月、平均十五歳一カ月となっていた。また、入学者の父兄職業をみると、本科では農業が十三人、工業一人、商業二十四人、その他十三人で、技芸専修科は農業六人、工業一人、商業八人、その他九人となっていた。入学者の出身地では本科第一学年の場合、津市が二十人、員弁、三重、河芸、飯南の四郡がそれぞれ一人、度会、北牟婁、南牟婁の三郡がそれぞれ一人、多気郡四人、安濃、一志の二郡がそれぞれ五人、他府県七人であった。

つぎに第二学年以上の入学状況は、高等女学校創立に際して津市女学校在学生で上級学年への入学希望者が多く、その結果第四学年入学志願者が四十五人あり、うち際上の問題としても無理(ひ)の急である。と説明した。

ついで県側から、津市女学校の建物七棟および付属物、建家百八十三坪七合五勺(六百六平方メートル)を、県高等女学校設立のため譲受けるものとす。という議案が提出されたが、これ対し員弁郡選出の石井四郎議員らから、県の経費過(ひつ)迫の折柄、殺立は一年延期せよとの意見がだされ予算案とも調査委員に付託となった。

さて注目の調査報告によると、

提案理由として県側は、高等女学校費が三十一年公布になった結果、一県に一校設置が義務づけられ、第一二万四千七百六十六円四十九銭三厘の教育費原案が提出された。

ところが、県会は臨時部教育費第一読会として、二千二百三十五円三十一銭の高等女学校費審議に入ったが、これが教室増築に当てられる経費で、その位置は譲受け校舎の南隣に予定されていた。当時津市女学校の界隈には土地がありそれを埋め現の校地を拡張する計画であり、この工事は藤重家が負担することになっていた。

これに関して三重郡選出の藤重信議員から、二千百三十三円五十四銭四厘とする修正案がだされ審議の結果これは他の教育諸費との均衡上からも削減したいという意向が強く、ついで別途統部教育費として提案されていた、七百六十四円三十一銭二厘の高等女学校費審議も異議なく終わり、ここに連年の懸案であった県高等女学校設立の関係議案は滞りなく可決したのであった。

以上の経緯による高等女学校設立が確定すると、県では早速津市女学校裏の拡張敷地に、長さ十一間(十九・八メートル)、幅六間(十・八メートル)の校舎一棟の建築にとりかかった。一方、文部省に対して三十四年度から開校の届(りん)申を行った結果、松田正久大臣名で、設置ならびに位置選定の件、校舎、寄宿舎の借用と教室新築の件、学則ならびに授業料規則の件が、翌三十四年一月認可になった。

認可内容によると、名称は三重県高等女学校、生徒定員四百人、但し三十四年度は一百人とされ、学則第一条本校の学科は本科、補習科および裁縫修科とすとされていた。

ところで、本科規則は修学年数四カ年で、学科目は修身、国語、外国語、歴史、地理、数学、理科家事、裁縫、習字、図画、音楽、体操と、臨時科目として漢文、手芸を加えるとされたが、外国語は生徒の希望で実施しないこともあるとされ、また、作法、家事、音楽の二部として一週に一回もしくは数回、茶道、挿花、箏曲の科目を教えることがあるとされた。入学資格は品行端正、身体健全な満十二歳以上の者で、高等小学校第一学年の課程を修了した者、またはこれと同等以上の学力ある者とされた。

本科課程としては、修身が第一学年、第二学年とも一週一時間で三年、四年はそれぞれ一時間、内容は全学年とも人倫道徳の要旨と作法となっており、国語は全学年とも一週四時間で、一、二年が講読と作文、三、四年が同上と文法とされた。外国語は法語で全学年三時間、一、二年が綴方、訳習字、書取、会話、三、四年が読本、訳文、会話、文法、作文、歴史は一、二年が一時間で本邦歴史、地理は全学年一時間で、一、二年が本邦地理、三年外国地理、四年外国地理、数学は、一、二年三時間、三、四年一時間で、一年が筆算の整数、分数、小数、二年筆算で比例、百分算、三年筆算で求積、幾何の初歩、それぞれ珠算で加減乗除、理科は全学年一時間で、一年植物、動物、二年化学、衛生、家事は三年一時間で衣食住、四年一時間で育児法、看護法、救急法、家計簿記、御茶(ぼう)、裁縫は全学年時間で、一、二年通常衣服の縫い方、整ち方、三、四年同上と積い方、習字は一、二年が一時間、三、四年一時間で、一年横(かい)、二年行書、三、四年仮名交ぜり草書、図画は全学年一時間で自在画、音楽は全学年一時間で、一、二年が単音唱歌、三、四年が同上と複音唱歌、体操は全学年一時間で普通体操と遊戯、漢文は、三、四年一時間で講読、手芸は全学年一時間で刺繍(しゅう)と綾(りょう)物となっていた。この各学年合計時間数はいずれも一週二十時間となっており、但書として外国語、漢文、手芸のうち、一科以上修学しない場合は、その時間数を家事、裁縫に充当するとなっていた。

つぎに、補習科は一カ年の修学年限で、学科目は修身、国語、外国語、数学、家事、裁縫、習字、図画、音楽、体操、漢文、教育、手芸となっており、一週間教授時間配科目それぞれ一時間、三時間三時間、二時間、二時間、五時間一時間、二時間、二時間、一時間二時間、一時間の計三十時間となっていた。

また、技芸専修科は修学年限三カ年で、学科目は修身、国語、算術、家事、裁縫、手芸で、時間数は一年がそれぞれ一時間、三時間一時間、一時間、十八時間、六時間で家事はなく、二年が一時間、三時間、一時間、十八時間、五時間、三時間、三年が一時間、二時間、二時間、一時間、十八時間、五時間の計三十時間とされていた。そして同専修科の場合、作法、家事の一部として一週に一回以上それぞれ計三十時間となっていた。また、入学資格は満年齢十三歳以上で、高等小学校第一学年の課程を修了した者、これと同等以上の学力ある者とされた。

つぎに技芸専修科規定として、本科技芸専修科三年級とされ、一カ月全て出席しない者は徴収するとし理由なく一カ月滞納した者は学籍から除くとされた。

寄宿舎規則では、舎生は徒歩日に舎監の許可を受けた場合、一回以上帰省、外出が許されるとし、これ以外に止むを得ない事故で半日以内の外出が許されるとし、これ以外に止むを得ない場合は、保護人もしくは兄弟(なつ)印の願書を提出すべしとされた。また、金銭はすべて舎監に預け、必要の都度受取るべしとされ新聞、雑誌をはじめ、課業の参考以外の書籍は、校長の許可なければ携帯したり購読してはならないとされた。また、舎生を数組に分け、そのなかから組長、寄長を選んで、組内の親睦(ぼく)をはかるよう命ぜられた。なお、津市外の通学生で同市内とか、同市近傍に寄宿しようとする者は、校長の許可を受くべしとされた。

さて、学校では以上の諸規則を三十四年三月十三日、県会第二十号で定められると、四月の開校をめざして入学試験の準備にとりかかった。

その結果、本科第一学年の入学志願者は五十一人あり、この全員が無試験入学を許可されたが、その入学前教育程度は高等小学二年修了が六人、二十四人、高等小学卒業が一人、高等小学卒業が一人、高等女学校一学年在学が一人、尋常小学校補習科修了で津市女学校在学が十九人であり、その年齢は現在長者が十八歳五カ月、最年少十二歳、平均十二歳五カ月となっていた。一方、技芸専修科は一学年の一学級のみ募集したのであったが、応募者は予定数に達せず、入学志願者が二十四人で、これも全員が無試験入学となった。この入学前教育程度は高等小学二年修了が五人、高等小学卒業が六人、高等女学校一年在学が一人、尋常小学校補習科修了で津市女学校在学が十八歳九カ月、最年少十二歳一カ月、平均十五歳一カ月となっていた。また、入学者の父兄職業をみると、本科では農業が十三人、工業一人、商業二十四人、その他十三人で、技芸専修科は農業六人、工業一人、商業八人、その他九人となっていた。入学者の出身地では本科第一学年の場合、津市が二十人、員弁、三重、河芸、飯南の四郡がそれぞれ一人、度会、北牟婁、南牟婁の三郡がそれぞれ一人、多気郡四人、安濃、一志の二郡がそれぞれ五人、他府県七人であった。

つぎに第二学年以上の入学状況は、高等女学校創立に際して津市女学校在学生で上級学年への入学希望者が多く、その結果第四学年入学志願者が四十五人あり、うち際上の問題としても無理(ひ)の急である。と説明した。

ついで県側から、津市女学校の建物七棟および付属物、建家百八十三坪七合五勺(六百六平方メートル)を、県高等女学校設立のため譲受けるものとす。という議案が提出されたが、これ対し員弁郡選出の石井四郎議員らから、県の経費過(ひつ)迫の折柄、殺立は一年延期せよとの意見がだされ予算案とも調査委員に付託となった。

さて注目の調査報告によると、

提案理由として県側は、高等女学校費が三十一年公布になった結果、一県に一校設置が義務づけられ、第一二万四千七百六十六円四十九銭三厘の教育費原案が提出された。

ところで

年代を越えた楽しい交歓

第八回津高大阪同窓会総会

菊花薫る十一月十七日、第八回津高大阪同窓会総会が、大阪上六の都ホテルで催されました。当日は生憎の雨天のため欠席者多かれる常連の中にも欠席の方がかなりありましたが、約六十名の会員が参加され、特に今回は学校からも竹校長、市川幹事、本部から大藪会長を始め、阿倍、今村、佐々木副会長、慶師の真弓、後藤、土保小川、藤原の諸先生等十二名もの来賓を迎え、実に盛大な催しとなりました。

総会は水谷君（S24卒）のいつも変わらぬ名司会のもとに、野崎幹事長（T10卒）の経過報告、野田会長（M42卒）の挨拶、大藪同窓会会長の本部活動状況の発表についで、小竹校長先生の母校の近況報告があり、出席者一同深く感銘を受けました。

ひき続いて懇親会に入り、五つのテーブルに分れて、同年輩、同性同志が夫々恩師を囲み、学生時代を偲んでの昔話や故郷の思い出に花が咲き、思わぬ所で遠縁村同志の名乗りをあげる等、年代を越えた交歓があり、いつしかビールのさかずきが立ち並び、会計幹事を心配させる程の盛況でした。

また、各テーブルから弟子との入天ぷらスピーチを発表する程盛りあがるうちに、津中学校、津高女の校歌の大合唱の交歓をし、最後に一同記念撮影をし、午後一時すぎ会長の発声で万歳を三唱して盛況裡に幕を閉じました。

今回は例会場の阪神グリンルームが改装工事中のため都ホテルで催しましたが、次回からは元通りに阪神百貨店のグリーンルームにおいて十一月十六日（日）十一時より開催しますから、お互いに誘い合って多数ご出席下さるようお待ちしております。

なお、会長さんもヤングの参加がないと嘆いておられるので、若き本業生、特に学生諸君が出席されるよう願っております。

松本準三記（S10卒）

先輩とは有難きもの

松阪陳川親交会第六回総会

六月二十一日、六時より市内愛宕町「武蔵野」に於いて開催されいつもの通り、同窓会長の大藪治郎氏（T13卒）副会長の阿部喜兵衛氏（S4卒）津高校校長、小竹氏の出席を頂き恩師として一見、藤原、木業の二先生をお招き致し宿「武蔵野」に於いて開催されいつもの通り、同窓会長の大藪治郎氏（T13卒）副会長の阿部喜兵衛氏（S4卒）津高校校長、小竹氏の出席を頂き恩師として一見、藤原、木業の二先生をお招き致し本年は後藤（義）寺田重雄、佐野吉郎、林の四先生は、ご用件の為ご欠席にて一同残念に思われた。

出席者は七十五名に一年振りに若返り、校歌、寮歌等落合をはり上り大いにハッスル、和気あいあいの内、またたく間に楽しい一時が過ぎてしまった。

また、宇野先輩（T15卒）より赤エイを大量に頂き、早速茶ダシとなり会員舌鼓をうち先輩の厚情に感謝した次第。なお、酒、ビールは何時も先輩よりのご寄贈で飲み放題、全く先輩とは有難いものです。

当会も発足以来六年を経、毎年出席者も八十名前後とおちつき、一応完成致しましたが、その間、物故者も二十名となり淋しい気が致します。当日も一同物故者への黙祷をさせました。

会員にも多少の移動もあり、本年度の事業として名簿を再発行致すことになり、特志者附と広告料でまかない、会員全員に無料配布致す予定です。

将来は機関紙を出し度いと思っております。

参考迄に、松阪陳川親交会の組織を書かせて頂きますが、現在、名簿もれの方がございましたら事務局宛ご一報下さいますようお願いいたします。

会則の一部

一、会員

三重郡内津中学校出身者（または入学者）にして松阪市、飯南郡一志郡宗田川以内多気郡、度会郡に在住者を正会員とし、他地区より松阪地区へ勤務の者並びに津高等学校卒業者を準会員とする。

一、役員

1、会長　一名
1、副会長　三名
1、代表幹事　若干名
1、年度幹事　各年度一、三名
1、顧問　津高校校長、陳川会長並びに副会長
1、相談役　明治・大正の卒業者
1、事務局　松阪市役所、笠原

幹事に於き事務局若干名を会長委嘱する。

会員四五〇名

（笠原筆記（S20卒））

津高 東京同窓会に出席して

S3卒　天野清子

昭和四十九年もあと僅かという十二月十四日、快晴に恵まれた年後、都ホテルで同窓会が開かれました。

暖かい落ち付いた地下室、すでに何人かのお顔みしりの姿をお見うけして安心、遠路、津よりご出席下さった同窓会長はじめ、先生方に対して、あまり東京の出席者が少ないのではないかとひそかに危惧の念を抱いていたのですが、本日の出席者は四十七名、まさに今日は二月十四日、赤穂義士打ち入りの当日、四十七士に因んだようで、小人数ながら、和かな雰囲気に包まれていました。

嬉しかったのは、本年度津高を卒業して東京の大学に進学された秀才、才媛のヤングが男子二人、女子三人揃って出席、若々しい清新な息吹きを吹きこんでくださったことです。

私の隣りの席に坐られた可愛いお嬢さんたち、年頃も内の孫とそっくり、同窓のよしみで親、子、孫と三代がとりとってこの席につらなっていることに深い感慨を覚えました。これから後も更に何代も何代もつながってゆくであろうことを思いながら。

北川登氏、北智一氏、二人の北川氏の司会ぶり、いつもながら軽妙で楽しうございました。

なつかしい母校の校歌を歌う時の声の張り、眼の輝き、この時ばかりは若年も青年も感慨に燃えているかの如く思われました。三重校の校歌はいささかボリュームが足りなかったようです。きっと私たちは、あの頃いとうつましやかに教育されたせいかも知れません。

今日は若い人達も住かったようで隣りの空から華かなリエディングマーチが流れて来ました。そして廊下伝いに扶いて来る老婦の姿まで、かい間見て、一同、またたく間に拍手を送ったことでした。

ヤングの方たちも来年はもっと大勢の仲間を誘って来ることを約束してくれました。若い人たちにこの会を若返らせ、盛上げて下さることを希っております。

ためらいながら出席して、いつもあの本当に来てよかったと満足して帰路につく同窓会です。来年からは時期を変更して、六月頃に新入生歓迎会をもって同窓会を予定と伺いました。その日迄待ち遠しく筆をおくことに致します。

未だ皆様の記憶に新しいと存じます。七月十四日、津市長決定の瞬間を……移入市長が徳さ、あげくの果ての不祥事件と世たる国的な保守退潮革新拡張の潮流。加うるにその一週間前の参院選挙革新気勢大いに上がる中、秀等が級友岡村は自民離党とはいえ保守色強い候補として立ったのです。そして承知の大接戦の末、久一振り津市生え抜き、津市出身の市長誕生を見ました。

選挙とは人智のあらん限り人間の良き面、悪しき面を赤裸々にさらけ出させる修羅場です。その様子はこの欄では持ってこれ、同級生は勿論、陳川の皆さん様から、心からなる応援を頂き有難く、感激いたしました。狭い土地での選挙ゆえ、色々の関係から直接に援護頂けなかった方々も、電話で、或いは人伝てで推薦の意を表して頂きまた、吾等が全く関知しなかった方々もさぞ名方面で力強い支持を頂いたことと存じます。

数年前、戦争、死亡者の慰霊祭を行ないました処、吾々昭和十五年の卒業生は一七五名中六十名も戦争犠牲入りした同級生を数えます。二、三年前後のクラス共々第二次大戦における最悪の年代と思われます。更に残念に想うのは頭脳明晰、至誠敢闘、情熱献身の力量において遜色なかった級友が、その三分の一を失われたことです。卒業生の二分の一を失いましたが、その人が失われて居ります。卒業生の二分の一を失いましたが、その人が失われて居ります。卒業生の二分の一を失いましたが、その人が失われて居ります

気象界に少い津高卒業生

伊藤　博

私が気象庁に勤務していた間に感じたことが一つある。それは気象の職場には、津中や津高の卒業生が極めてわずかしかいなかったということである。私の知る限りでは専門教育を受けて気象業務に従事していたのは、私のほかには昭和十六年に気象技術員養成所（現気象大学校）を卒業した山本常男君ただ一人である。そのようなわけで津高同窓会報に気象のことなど投稿する人は当分なさそうである。そこで、今回原稿を求められた機会に気象に関連した話を二、三綴ってみたいと思う。

まず、なぜ気象界に津高卒業生が少ないのかという理由を私なりに考えてみた。三重県のように気候の温和な所では県民生活の気象への依存度が低い。そのため気象業務に対する関心も薄くなる。これに対して、すべて気象の影響を強くうける東北・北陸道・北陸では気象に対する関心が強く、これが気象業務従事者の数にも影響する。これと似たようなことは外国にもある。気象的に条件の厳しいノルウェー、スエーデン、ソ連、イギリス等の国々から多くの優秀な気象学者が生れているのに対して、気象学者は生れないのである。

しかし理由はそれだけではないようである。私が長らく気象庁にいて、全国各地の気象利用の状況をみてきたところによると、三重県は最も利用度の低い方に属していたように見受けられた。

さて気象の仕事といえば、まずテレビ、ラジオ、新聞を通しての天気予報、注意報および警報が皆さんには一番なじみが深い。その予報や警報は各県におかれている地方気象台で作成される。気象台の気象台や測候所の観測資料が使われるだけでなく、中国、ソ連、韓国等隣接国からも気象情報を入手する。その情報の量は国内で得られるものの何倍にも達する。それぞれの国の言葉は違っていても気象を表わす言葉は世界的に統一されている。そのように予測技術という面では、気象業務は他の分野より一歩も二歩も前進しているといえるであろう。

天気予報は当たらないといわれながらも頼りとされている、人間誰しも、何かが先の見通しなしには事をすることはできない。予測の予測がなければ占いにでも依存しようとする気持ちは洋の東西を問わない。このような意味では経済の予測や気象の予測にもまして重要である。適切な予測に欠けていたために、多くの国民が必要以上の苦しみを受けるのはたまらない。

それはさておき、日本のように気象変化の激しい国では、いつ強風が吹きまた大雨が降らないとも限らない。そのため各地の気象台では一年三六五日昼夜の別なく気象の状態を観測する。同時に、予報技術の改善にも大きな努力が払われてきた。気象庁では約十五年前から気型計算機利用による予報に取組み、今日では実用の域に達している。近日中後七時NHKテレビで放映される明日の天気図は計算機を使って作り出したものである。このように予測技術という面では、気象業務は他の分野より一歩も二歩も前進しているといえるであろう。

気象状態の観測の方法についてもいろいろと進歩してきた。それらのうちレーダーは雲中・降雨の監視に大きな役割を果している。また近年になって気象衛星によって空のかなたから地球上を監視する技術が開発され、すでに実用の段階に達している。とくに二三年後には計算機協力によって飛躍上ほぼ等間隔に五個の気象衛星を打上げ、これによって地球面の大部分を常時監視しようとする計画が進められている。このうちの一個は日本が打上げを分担することになっており、着々その準備が進められている。これらの気象衛星から得られる資料が実用化されるようになると、予報技術もさらに向上し気象業務に二つの転機が訪れるであろう。

（元気象大学校長）

ミニ同窓会

三重桜一身田部会報告

森川護子（S13）

秋も深くなった十一月二十四日、恒例の三重桜一身田部会が開かれました。所は、高田青少年会館です。定刻の一時、一瞬への黙祷を捧ると、もう賑やかなおしゃべりが伝ってきました。私は一見田近辺の三重校会員が、一堂に会するのは、今年で六回目になります。七年位前でしたか、同窓会の準備会が、総会をかねて高田本山で催された時、地元の我々も数人出席致しました。終了後、大先輩の下津芳子さん（T-1）が、「近くにいてもあまり顔を合すことのない私達だから、一度ずつの会合だけで集ったらどうでしょう。場所は私の邸を使ってください。」とのことです。狭い町のことですから、時々はおみかけしますが、一体どこの近くにどなたが住んでいるかもわかりません。津高同窓会会員名簿の三重校の頃を、一頁一頁繰ってゆきますと、何と皆近いらっしゃる様です。新しく出来た団地にも居られることと、あちらこちらお尋ねし、やっと一身田、大里地区の名簿が出来ました。

下津高は珂雪園といって、桜の古木が多く、又秋の紅葉も美しい名庭園があります。第一回の部会は、五十名位集り、広い座敷も一杯になりました。今まで町でお会いしても言葉を交したことのない方々も、三重校の糸口でお話ししたり、話題も多く、賑やかな談笑が続きました。お茶席を拝見し、お抹茶を頂き、心ゆたかな会は終りました。

あれから当番の地区会員のお骨折りで回を重ね、紅葉の頃になりますと、部会を楽しみにしてまいりました。現在、高町居住者を含めて、会員数一一二名になりました。

今年は、高町居住地区が当番です。先づ、赤塚みつえさん（T-3）の挨拶で始り、田中ちゑさん（S-2）の美しいソプラノに合わせ校歌を合唱しました。自己紹介、懇談など、時のたつのも忘れて話は尽きみます。

会長は仏教婦人会会長をしていらっしゃる平松操校さん（M44）で、八十才とは信じえぬお若さです。元津高教諭、国府恵先生のお母様も御姉妹で会員です。お若い方は、「卒業式を重苦い場から、断けつけた」といわれる丸山さん（S20）、最後の三重校としての卒業生・井ノ口さん（S24）達です。神経痛をおして、始めて出席された橋爪さん（T-6）は、「皆さんにお会いして本当に嬉しかった。次回も是非出席したい」と喜んでお帰りました。平井先生作「安楽庵の四季」の屏風を背に、記念写真を撮り、再会を約して、会は終りました。今年は、春の総会が、一身田であったため、出席者が少なかったのが、残念でした。

外人と笑い

佃　薫

昨年の夏、三重県卓球協会の通訳としてオーストラリア・ニュージーランドへ渡った時、感じたことをちょっぴり。

日本人を評してよく「勤勉」とか「礼儀正しい」と言われますが、裏を返せば「ユーモアとか笑いが少ない」ということにもなると思います。ところがオーストラリア人あるいはニュージーランド人が何とユーモラスで笑いの好きな国民であるかという例をお話ししたいと思います。

まずシドニー空港での話です。税関で申告すべきかどうか迷っていたギフト用の真珠のタイピン・ブローチ（約百個）が発見されぬ口調で「ホワットイーズシス？」とやられました。「あのうえーと」これは選手に渡すおみやげで商売用ではありません。真珠のふるさとをそはこんなかの貝殻同然です。ところがもらの言うことにはあまり耳をかす暇もなく一個をとり出してしげしげと眺めた末、更に顔をこわばらせたかと思うと、声を低めて「ユーキャンパス、イフユーキャンスワントウマイドータ」「ようそ、ようそ娘さんだけ言わずに奥様にも一ツどうぞ。」お陽で他の荷物の検査なし。御本人至言さんのがとう。

無事入国、一週間の練習試合後ニュージーランドへ。二十五年に一度しか開かれないという記念大会に参加するためにオーストラリアチャンピオンと共に出国。ニュージーランドでは三重県選手が単・復共に優勝し、意気揚々とオーストラリアに再入国した時の税関でのやりとり。「君タチハジャパンティアルテニスプレーヤカ？向ノ国ヲニュージーランドヘ行ッタカ？」「かくかくしかじかでした。」「大会の結果ハドウダッタカ？」「オーストラリアチャンピオンも軽々とノックアウトして優勝してきた。」「何ッ、オーストラリアチャンピオンヲ破ッタト？」と言いざま、傍にいた若い腕っぷしの強そうな係官に「君、コノチャンピオンヲ表ヘピッパリ出シテ、右腕ヲヘシオッテシマエ。サー急イデタ。」追い出されるようにまたもノーチェック。因みにオーストラリアは動植物及びその製品の持込みを厳しく制限していて、あちらでは、やはり税関で四箱ラーメンを二十袋没収されたとか。

次はキャンベラでのバスの車内での話。七年ぶりの大雨とかで市内遊覧バスの数名ない乗客の顔も何となく沈み気味。ところが、ワンマンカーの観光バスの運転手走り出すや否や「皆様の日はあいにくの雨で申訳の景色を十分に楽しんでもらえません。それどころか寒が冷えてしまって今は何も見えません。恐れいますがこの愛とれるまでしばらく息をとめていてくれませんでしょうか……」すると、誰かが苦しそうに「イエサー！」

すべてがこういう調子であります。何かこういった「ウイット」「ユーモア」、「冗談」とかが彼等の日常生活の不可欠の潤滑油みたいなものになっているようで羨ましく感じました。

（津西高教諭）

先輩の方々の、しっとりと落着かれた御年齢ぶり、社会奉仕に専念していらっしゃる尊いお姿、趣味を生かしての指導者ぶり、等々お言葉のはしばしにも、窺知されることが多く、なつかしさの中に自分にも何かフィットが、湧いてくるのを覚えました。

津高卒業の方々も、お入り頂けましたら、心から歓迎致します。会員の皆様の御意見、御希望をお聞きし、魅力ある部会になればと思います。

旧師短信 (5)

岩田　直衛

氷雪に時が刻まれて、入学市の中でく津中から高校といってしまえばそれまでですが、二十六年という歳月、まさに生涯の上も在職した校名が、学舎推の中で津高の姉妹校ともいうべき津西高等学校へ昨年四月開校と同時に転勤を命ぜられましたので、一言御挨拶を申し上げたい思います。

津西高へは七人が転勤しましたので、はじめはなんだか津高の"出張"の感がありました。

ところで私は去年四月の津中校舎で入学試験を受けましたが、入学式は現在地に移転して挙行され、卒業後徴兵猶予までも講堂で行くしくも新学制により昭和21年高校発足と同時に津高教員を命ぜられました。しかしその時は全く焦土の中で校舎が灰じんに帰していましたので、兵舎のあとを借りたもので、のみがはねまわっているひどい仮校舎でした。

二十六年間を反省すると、浴中ものの、主世界史の授業を担当しましたが、日本史のほう漢文や徒然草までも受持ったこともありました。

ところで津西高は建設途上の学校です。伝統もこれから私達の手で創造していかなければなりませんが、全職員が将来大きな夢をもって教育に当っています。私は津高とのよい意味でのライバル校になってほしいと思っています。お互の協力とよき対抗意識の中で、津高がますます発展するのだと思います。津高が太陽のごとくさん然と輝き続けることでしょうが、西高もまた緑の風当山の丘の上に新しい時代のいぶきを受けて発展するように私なりに精一杯頑張りたいと思います。

大過なく津高に勤務できたのは一重に皆様のあたたかい御力添えの賜ものであると厚く御礼申し上げますと共に、今後とも御指導、御鞭撻をお願いいたします。

木葉　信行

住みなれた「おしかべ」の地をはなれてから九ケ月が過ぎ去りました。皆様方お元気で元気した日々をおすごしのことと思います。殺伐な職場が絶対の必須品だった後には計算機協力によって飛躍上ほぼ等間隔に五個の気象衛星を打上げ、これによって地球面の大部分を常時監視しようとする計画が進められている。このうちの一個は日本が打上げを分担することになっており、着々その準備が進められている。これらの気象衛星から得られる資料が実用化されるようになると、予報技術もさらに向上し気象業務に二つの転機が訪れるであろう。

（元気象大学校長）

勝田祐次郎

昨年四月から前記へ転任しました。三十九年からちょうど十年、歳月の経つのは全くはやいものでした。この十年の間、津高に勤めさせてもらったことは、私にとって種々な点で大変勉強になりました。同時にまた楽せてもありました。

赴任した当時の津高は婦人学級復興の途上にあり、また生徒数増加でもあって、混乱と騒然が同居していました。その後、学生運動の波が押し寄せた後、環境の整備と秩序の回復が進むとともに落着きを取り戻すと同時に活気もうすれたように思われます。高校教育のあり方についていろいろ考えさせられる問題がありました。

新らしい学校へ転任したとなるとまた新らしい視野が開けるようで亀高から津高へ転任した時と同じ感を懐きました。新らしい学校であと十年にみたない在職期間を頑張りたいと思っています。

林　茂典

十年一昔といいますが、二昔も勤めさせて頂いた津高を去り、母校、神戸高校へ転勤しました。

家を出て、国道一号線を東へ、神戸へ向うのですが、未だ国道を横切り、津へ行く衝動に駆られ、ハンドルを左へ切ることがあります。

中谷　和夫

津高を去った今、津高での教育生活は、私の人生にとって大きい位置を占めていました。

昭和二十五年に修成小学校の一部を借りた校舎に一年担任として赴任したのですが、その当時の同僚の先生方は、すでに大方退職や転任をされました。

津高はいつも若く生き生きとした姿に満ちていました。毎日が変化のある充実した生活でした。

このたび津西高へ転任を命ぜられ教職の建設に微力ながら励んでおります。津高を去りましても今まで同様御厚情を賜りますようお願い致します。

佐野　由子

月日の立つのは早いもので、昭和二十九年咲く四月一度目の赴任をし、二十年という長い歳月を過させて頂きました。

丁度体育館が落成した年で、津高の御厚意により、その年から十一月一日に移りました。

古い校舎が新しい鉄筋の建物となり、運動場が改修され、など、数々の思い出が走馬灯のように頭の中をかけめぐります。

暖かい太陽のもとでの授業、ホイスルが口に薄りつくような冬の日など、又秋のマスゲーム、生徒の誠踊指導、皆懐かしい思い出となってしまいました。

津高を去る日、運動場を眺めておりますと、二十数年間の教え子の顔が重なりあって浮び上って眼頭を覆ってきました。

思い出は尽きず、去りがたい思いでした。

今度参りました新設校では良転を祈いての通勤を相当長い間しましたが、六月には立派な通学路も出来、第二グラウンドも半分完成して生徒も元気に張切っております。

津高のように立派な姿になるのには、今しばらくでございますが私は一年生を担任させて頂いて、気持ちだけでも十才若くなって、生徒と共に元気に働き動いております。十一月には講堂の免許も頂きまして、やっと車に乗れるようになりました。

学校の周辺の河辺の山々は秋に は紅葉してさながら安芸国の紅葉のようにすばらしい眺めでした。桑名、宍塚の皆様、津高を離れてみて、つくづく考えてみますと、津高はやっぱり名実共にすばらしい学校でした。思い出深い津高の発展と諸先輩の御健康を祈って近況報告とさせて頂きます。

〝遠くて近い上海〟

―『青春残像』の著者―

広瀬元一（S11卒）

昭和六年　満州事変勃発
昭和七年　第一次上海事変
昭和十年　日本〝廣東政府〟樹立
……。こんな頃からアジアの政局には不穏な空気が流れはじめていた。

私はその頃「上海市北川路恵安坊十四号」に板篤を構えていたのである。

引揚げてからもう三年経ってしまった今なのだが、あの時、あの地、あの人たちの想い出にかられるのは屡々である。古ぼけてしまわないうちに何とか自分なりにまとめてみようと思う一念が〝上海回顧―青春残像〟として昨年八月自費出版に踏み切らしたのでした。

当時の世相は同年代の方々はご承知のように不況と就職難の交錯していた時でもあり、その日々を〝大陸雄飛〟に志したのも、若者の間では悪い意味でなく当然のことであったわけです。

しかし、国を離れるまで自分の持っているその国への常識はその国に一歩踏み入れることによって自分の見識度合が余りにも貧弱であったことに気がついたものである。

ともあれ政局はめまぐるしく変転し、盧溝橋事変に端を発するやアッという間に日華事変、大東亜戦争―太平洋戦争と拡大してしまった。私はこれらのいまわしい過去のあつれきをすっかり度外視し一居留民として中国人の交流を日常生活の中に織り交ぜ〝本〟として仕上げてみたのである。

「上海」を知って頂くためにも一漁港から国際貿易港に至る過程を治安、経済、交通、言葉の上から努めて堅苦しくないスタイルで員をすすめていった。ことに数をとりまく身近な中国人の交流を中心にいろんな角度から二十数頁に分け登場させているが〝本書〟だけにいささかでもその片鱗をくみとって頂けると精魂を尽くしたことはいうまでもない。

本文の一部（P75～P76）を抜萃で紹介することにしよう。

『税関の大時計は六時をまわっていました。英美にでも、電話しようかと思っていたところへ電話です。同僚の蒲沢さんからでした。

「おいまた。例のところに集合だ。」

「曉得者　火速六個」

（わかった　すぐいくよ。）

こういった呼び出しは、これまで何回となく受けているので、別に慌てることもなく宝興路のわが家へ戻るやわざとよれよれの支那服に着換え、愛用の拳銃を手にすると虹口小菜場に飛びました。

ことあるたびに若者は、非常呼集に動員されては解決に参画したものです。

「いつものやりロなんだ。まだ二、三時間のことだから……」

「服装は？　年は？どっちへ？」

「服装は乞食、年は六十位。」

「曉得者　火速六個」

（わかった　すぐいくよ。）

こういった呼び出しは、これまで何回となく受けているので、別に慌てることもなく宝興路のわが家へ戻るやわざとよれよれの支那服に着換え、愛用の拳銃を手にすると虹口小菜場に飛びました。

ことあるたびに若者は、非常呼集に動員されては解決に参画したものです。

「いつものやりロなんだ。まだ二、三時間のことだから……」

「服装は乞食、年は六十位。」

一瞬緊迫にかすりの着物と黄色つぼい帯をしていたそうだ。それに極彩色のパラソルをもったと言っていたぞ。」

血の気の早い連中ばかりだし、スリルを味わえるとあって、二人ずつのグループを作っては相界に散っていきました。夕げどきのことで、町のどこからも中国料理特有の匂い、調理の鍋と菊子のこがれる金属性の音が、いやに感覚と感覚に訴えてきました。

どうせ不穏分子の仕業か、金が目あてのやからでしょうから気をゆるすことはできません。

ことにその日稼ぎの少ない労働者たちは、極端に日本人を白眼視していましたから、毎日が緊張の連続でもあったのです。ちょっとした油断が隙を与えるのです。日本女性の悪い習慣で、買物かごの上にちょこんと財布をのせていたり、帯に財布を挟んでいることが彼等の効果をそそる原因にもなっていました。

その上、中国人の間では淫風の家に住み、日本女性を妻とし、中国料理を食べることを最大の理想としていましたから、日本女性の誘惑、暴行はある意味で当然だったかもしれないし、考え方によれば報復であったかもしれません。

その日は幸しておかったのですが、二、三日たった日の午後になって、山西路はずれにあった綿花倉庫で、日本女性がみつかったのでした。

それから一日ほどたったころ一枚の招待状をいただいたのです。赤の縁取りと金字で中国風に印刷されていました。

請客　四馬路　杳花樓
今月廿日　半五六点鐘

その頃、日本料理はもちろん、一般の人たちもよく杳花樓に出かけては大なり小なり宴席を設けていました。日本人好きの味を通単と考えていたのかもしれません。ともかくお招きを受けたのですから、私たちはそれこそ堂々と乗りこみました。

広東路、三馬路をすぎ四馬路近くなると露地という露路は軒並み妓院（公娼館）でした。なんとなくざわついている気配―妓院の入口には四角い名刺や軒灯が目をひきます。赤いうっすらと紅着紙はムードをいっそう引き立てていて、流行していた中国や日本の歌が、胡弓に乗って聞こえてきました。』

昭和二十年　ドイツ無条件降伏
同年三月
日伊独逸降伏宣言

そんな頃から「日本は降伏しますよ」とか「日本は敗けますね」といった情報が中国人を通して私たちの耳に入ってきたものであるが、居留民だれ一人として信じてはいなかったものの、戦況悪化は〝終戦〟といった形で終止符を打ったのである。

私たちは「日僑」と書かれた白い腕章をつけ、虹口地区―北四川路、呉淞路に集結、八路軍の監視下にあった。

「国とのたたかいは終わりましたね。もう個人同志のたたかいではありません。お互いに祖国再建に立ち上がりましょう」と励ましてくれたり「何の不自由もなかりましたら出来るだけのことはしますから」と何がしかの金や食料を届けてくれたかつての使用人や取引先商社の友人たちのご厚情は忘れられないものである。

国境を越えた真の友情をこの時程しみじみと肌に感じたことはないし、異国にあればこそ痛切に感じたのでもあろう。

今でも「中国」と聞くだけでもジッとしていられない私「上海」と名のつくものは何でも乗りこみてはひとり追憶にひたっているが一日も早く日中正常友好の実現することを願いながら筆を擱くことにする。

（附川、三重県、津高同窓会の幹事の一人）

筆者は左から二人目

高校時代のショッキングな思い出

板垣秀子（S26卒）

仕事の焦燥、官都高速に走りながら、ビルを影にして美しい夕焼を見た。私は夕焼を見ると、故郷を思い焼れた心も帰えるのである。

管理者と主婦と母との三役をこなして早々十年。自分では甚のままのつもりでいるが、仕事を持った時、幼稚園児だった娘が今では高校一年生、上の娘は私よりも大の娘を産んだ年にさえなっている。

世間知らずで、我儘一杯の依頼心の強い娘時代に怠慢を大つかみなかった今の仕事を夫や子供が有りながら出来ないとは、本人はもとより、昔の私を知る友や肉親等考えもおよばなかったことと思う。最高に反対したのは誰でもない我が夫だったのだから……。

現在、神奈川県、東京都、千葉県、埼玉県と関東地区の責任者として七百余名のビューティコンサルタントとそれを管理する二名近くのマネージャーを指導、育成し、会社の方針、計画にそって販売目標達成のため東奔西走、週休二日制とはどこの優雅な人たちの言葉と思う程の日々である。二十才より六十才代の女性の隠された能力をひき出し、育成することの素晴らしさ、主婦としての感覚から少しずつ仕事に対する自覚を変勢を教え、管理者としての責任や義務を教育していく時、私は子供の成長以上の生き甲斐を感じる。無限大の能力への挑戦というのは大げさかもしれないが、実感として不可能を可能にし得た時の気持ちはそれ程の感がある。そして、その中で私自身が育てられて来たのだなれば―。

女というものは、すぐ感情的に行動したり、発言したりする。仕事の上でも親いやらしさを人無意識のうちに出したりするが物事の判断を明確にする習慣や客観的な立場から見ての判断力、大局的な考え方から出発して一つ一つの事例を解決して行く習慣が完全に身につくまでは平均して五年はかかると思う。家庭にいては通ることでも仕事の上ではあくまでも道を通されるのだから、一人一人の個性に合わせながら、実践指導やミーティングを行ないながら次々起こる問題を手とり足とり指導しながら、会社との営業方針にも沿っていかなければならない。商知識の教育の徹底といっても、各人々差一回でマスター出来ることもあれば数回繰り返しても駄目な人もいる。そんな生活の中で疲労困憊し、自分自身仕事の鬼になって、昔の私でなくなることの恐れが心をよぎる時、深夜一人静かに音楽を聞いたり、小説を読んだりしながら、学生時代の頃を懐かしく折々もあり、津高の同窓会の案内状を受け取り、すべての予定を変更して、若い頃の友人に合うために帰宅した。今夏のことである。

思いがけず三ッ村先生と岩田先生ご出席になり、六十名以上の友人が席を連ねた。なつかしい顔、顔、顔の中で残念ながらすっかり貫録のついた私は中々思い出しでもらえず、三ッ村先生は自己紹介なしで判ってもらえたことが唯一の救いだったかもしれない。先生方は昔のままで二十三年のオ月を感じられなかったが、旧友たちの十代の頃と四十代との変化は各々が二十三年という才月の重みが如実に表われていた。純粋な若者が世の荒波にもまれて生活して来た年輪がその人を大きくも、小さくもしていた。学生時代に変来た年輪がその人を大きくも、小さくもしていた。学生時代に変先生方は昔のままで二十三年のオ月を感じられなかったが、旧友たちの十代の頃と四十代との変化は各々が二十三年という才月の重みが如実に表われていた。純粋な若者が世の荒波にもまれて生活して来た年輪がその人を大きくも、小さくもしていた。学生時代に変

フランス・バンド

の像と重ならない人、感慨無量で昔と話し合っている時、東京からかけつけた松岡君、私の側に坐られると懐しそうに津高時代のことを話されたり、有田先生に叱られた時、私が弁明してあげたことがあるとか、残念ながら私にはその記憶もなく彼の仕事の話とかを伺ううち、会社が私の会社の近くと聞き、是非一度東京でお会いしましょうといって急ぎ東京に帰られたが……。

翌日、帰京の車中で若い頃の思い出と昨日の皆さんの顔と思い浮かべつつ、昔のパンカラさを残した松岡君との会話をなつかしく時ハッと学生時代の域を一つのことを思い出した。二十三年来、忘れることの出来なかったこと、その間に去来した人たちに話して来たことの主人公が彼であったことを―。

私の知ずみ様には会社でも、家でもまた私を知るすべての人が知っている程に有名になっている。嫌いというより恐ろしいといった方が適切である。常軌を逸するとまでいわれる位名物的な存在になってしまっている。それは物心ついてからこの才に至るまで―。

なのに、父国の兵舎に男女共学で柳川より移って間もなくだったと思う。バザーのために、ある物資不足の頃であったけれど会員で持ち寄ることになり、委員の私はその回収の役目を受けた。その翌日、早速に白い紙を出した男子生徒が有り、書道教室に提出したと言うことに広い兵舎と兵舎をかけながら、落とすまいときゅっと握ったその包み、一度書道教室に忘れたものを早く届けられたその生徒の母なる人の女ごころを考えたら、やっと音楽教室に坐った時、先程から手の中でのやわらかな感触が砂糖か粉かという疑問を起こさせていたので、やっと折り返しなくるくるとめくり右側に紙を広げると黒いひもが見えた。布の袋に粉を入れてひもで結んであるのに付き添ったその男生徒の母親の姿が又々心の中で美しく広がりつつある時、そのひもには細い横線が重って入り、少さな細い毛が無数に生えているのを見た。流石私は狂人の如く包みを前にたち出し、キャーアの一声、音楽教室全員総立ちとなり、あっちからも悲鳴続出。なげられた包みの中から ねずみの死体と生きた蛙がピョンピョン。私の目からは涙。

丁度そこに小川先生が入室され「誰か捨てこらっしゃい」と立てじわを寄せられた厳しお顔、気の毒に気のいい佐藤さんが即刻出られたが、私はその後のことは憶えていない。勿論、大好きな音楽も心臓の音でかき消される程の衝撃、展食も喉を通らず、男女共学の恐ろしさを身にしみて感じた事件である。その男生徒が誰あろう松岡君であったのだから、忘れることのできない人々、二十三年目に偶然同窓会で目の前にしたからこのである。有田先生のことを先に話され記憶になかったことその中し訳けなさが、心の中にあって私の思い出と松岡君が繋がりあったのかもしれない。過ぎて見れば楽しい思い出話として、今だにねずみと共に出る話を作ってはならないかもしれないが、高校時代の最大のショックな事件といえばこのねずみ事件なのである。包みを渡した松岡君の顔をみたに忘れないのも、死ぬ程のショックを味わった時、乙女心に復讐を考えていたのではないだろうか。

既に昨年は孫を生んだ母となり、うっかりいたずらすれば逆にひどい目に会うという。だが何時の時代でも女はやっぱり強く美しく可愛い女といわれるようにしたいと思う。経済情勢が悪化する中で、人の心もすさんで来つつあるとい うが、人生七十年と平均寿命は延びたといえ、東京の公園都市の中で生存競争のはげしい所で、可愛いのない時を過ごして行きたいと願っているのが津高時代の友だちであり先生方である。明日は横浜のホテルでクリスマスの集会。午後は日本橋でマネージャーミーティング。水・木曜は川崎市民会館で集会。水・木曜は熱海で全国の七名の責任者の懇談会議。金曜日は日本橋で新マネージャー教育とびっしりのスケジュール。

男性はゴルフや付合いで一杯というこども仕事の外の楽しみがあるが、女は仲々家庭と仕事で精一杯、それを何かつつ身につけたいと念願しているが自分を見失しなわないようにすることで精一杯の今の私に、どれだけのことが出来るか課題としておきたい。

事務局だより

○住所、住居標示、地番等の変更が行なわれた地区の方へ。

機関の変更のお届けのあり次第原簿の訂正を行なっておりますので、少しでも遅っておりましたら同封の葉書でお知らせ下さい。近々名簿の発行を致さねばなりませんし、会報托送の際にも区別に手間どり、また折角発送しても戻って来たり致しますので。

○同窓会費について

終身会費　千五百円
年度会費　百円

会費未納の方は、同封の振込用紙にてお払込みとさるよう お願い致します。（既にお納め戴いた方にも振込用紙が入れてありますのは、会報発送の際、区別をする余裕がない為で悪しからずご容赦下さい。）

なお、お近くの方でおとりまとめ願える方は、現金でお願い致します。

既近では新卒業生全員から終身会費を納入して戴いております。

会費は基金に繰り入れられ利息の一部が本会運営の経費に当てられております。本当に恐縮ですが宜しくお願い申し上げます。

（長谷川記）

〈編集後記〉

師走から風の吹くあわただしい年末に、原稿締切日を設定したが、さすが津高OBの方々は、忘れもせず原稿を送って下さって、楽しんで読んでいたなる記事も多く定分量に達し、ほんとうに有難く感じました。編集に際し何か新しい企画を、と考えてみましたが、稲高即号にゃく似た体裁に流れてしまいました。しかし文才に恵まれた方々のご投稿もあって、楽しんで読んでいたなる記事も多くいることと思います。ご協力を感謝します。（野口　聡）